

JA・教育学部の相互協力事業「米プロジェクト」
～食農を出発点としての人材育成への期待

湯崎 真梨子（和歌山大学 産学官連携コーディネーター¹⁾）

はじめに

食と農の乖離が問題となっている。家族形態の多様化、食に関する技術革新、地球規模の食料調達などにより、食生活は簡便に効率よく、多彩かつ豪華になった。しかし、この「豊かな」食生活は重大な問題を内包している。食生活の乱れによる健康問題、家族間コミュニケーションの減少など心身への影響、生産・消費の物理的距離の広がりによる安全・信頼性問題、国内農業の維持困難さ、農業基盤の脆弱化、農村の衰退、ひいては農地荒廃による環境問題など、である。ご飯を口に入れる、この行為から広範な地球規模の問題が見える、といっても過言ではない。

こうした問題意識のもとにコーディネーションに取り組んだ、JAと教育学部との相互協力事業「米プロジェクト」について報告する。

1. 事業の立ち上げ

1) 背景

JAグループは、2003年以降、「ごはんを中心とした日本型食生活と食農教育の普及」「地域に根ざした食農教育の展開」を掲げ、農業体験学習や給食への地元農産物の提供など食農教育を実践している。近年ではさらに地域との連携を進め、地域活性化までを俯瞰した運動へと展開しつつある²⁾。一方、和歌山大学では地域企業との食育に関する共同研究の一環として、キャンパスで地場産品である梅を使った朝ごはんを販売する「朝ごはんを食べよう！」キャンペーンを実施するなど、食育に関して地域連携を進めてきた経緯があった。

これらを背景として企画したのが、教員をめざす学生らを対象に、「食」の基本である農業とお米について、栽培実習活動を通じて学ぶ米プロジェクトである。

2) 連携準備

①学内体制

プロジェクトが将来にわたり、地域と連携した教育事業として認知・継承されていくことをめざし、教育学部事業としての位置づけを設定するために、学内調整を始めた。まずは家政教育・技術教育（農業教育）の教員らと方向性を決めた。さらに、決定の即効性を考え、教育学部長、教育学部事務長に理解を促し、学内調整に尽力いただいた。その結果、教員4名、有志学生29名、コーディネーターを構成員とした、和歌山大学教育学部とJAグループ和歌山との食農教育に関する相互協力事業「稲作から学ぶ食農教育—米プロジェクト」が発足。約1か月のコーディネーションで体制を整え、かろうじて田植え作業に間に合うことができた。

②協力農家

農地提供および指導などの協力農家については、JA和歌山中央会地域振興部の地元調整力にお任せし、日頃より小学校の農作業実習などに協力的な農家を紹介された。

2) 事業スケジュール

事業目的とスケジュールは以下である。

【目的】

- 1) 学校教育として食農教育を実践する力をつけること
- 2) 食や命を支えている基本である「ご飯・お米」は、「労働」により保たれていることを学ぶ
- 3) 88の手間がかかるという「米」づくりについて四季を通じて関わり、できるだけ多くの管理作業を主体的・積極的に行い、収穫の喜びを得ること

【作業スケジュール】

- | | | |
|-------------------|---------------|--|
| 1) 09,6/8 | 事前学習 | プロジェクト説明、稲作について事前学習、チーム分担、「田植え」作業の準備 |
| 2) 09,6/13 | 田植え | 手植えによる田植え |
| 3) 09,6/27 | アイガモ放飼 | 水田除草他の効果。柵・ネット張り |
| 4) 09,8/25 頃 | 花の観察 | 稲の花の観察 |
| 5) 09,9/11 | 用水路・池見学 | 「用水路の役割と管理」をテーマに、用水路から池を辿る |
| 6) 09,10/17 | 稲刈り・稲架かけ | 手刈りによる稲刈りと稲架(ハザ)かけ、「種を食べる」発見と意味を学ぶ |
| 7) 09,10/31 | 脱穀 | 機械脱穀・足踏み脱穀 |
| 8) 09,11/18 | 糲摺、精米 | 「種子から食材」へ |
| 9) 09,11/21 | 収穫祭 | 収穫米と鶏の解体による食事会 |
| 10) 10,2 月頃 | 報告会(予定) | |
| 11) プロジェクトを通じての作業 | 検討(収量構成要素の確認) | ①チームによる定期的な生育観察と記録、収穫までの個々の技術の調査・
②生育記録・作業日誌のブログ(HP)への記録・更新 |

3) 「米プロジェクト」と人材育成

上記の作業工程に見るように、本プロジェクトでは稲作における昔ながらの労働にこだわった。ここでは、2つの可能性を見ることができた。一つは教育学部と地域との連携が、組織対応かつ目に見える形で実践できたことであり、もう一点は、人材育成の観点である。

「作物を作るまでの労力とそれに賭ける人々の思いを感じるとともに、現状の課題に関して教育の場でどのような実践ができるのか」とは実習を通じた教員志望の学生による感想である。

頼りなげな苗から稲穂へ、その過程では突然の豪雨の中で泥だらけになっての稲刈り、脱穀で吹き飛んだモミの一粒まで拾い集めた、など、食と命と労働の関係、あるいは農と地域、社会との関連が少しでも実感できたのではないか。このリアリティこそが、次代の社会を担う人材育成のすべての始まりではないか、と考える。



- 1) 文部科学省産学官連携コーディネーター
- 2) 全国農業協同組合中央会「JA食農教育展開方針」2005年